

第八章 チクシ法

チ、ク、シの三音の何れかが、一語の第二音に来る場合、普通の符號の代りに簡単な記號を以て之を表はす方法をチクシ法といふ。

チクシ法は、その方法の卓越せる、その働きの巧妙なる點に於て他の數ある省略法中、特に異彩を放つものであつて、之が應用に慣熟するに従ひ、その絶大なる眞價は漸次味得することが出来る。

【規則】

第一音を表はす符號の首部有輪側に次の記號を附し、之を第二音とする。

- チ は大輪
- ク は小輪
- シ は小鈎

(例 94)

1.							
	カチ	サチ	タチ	ナチ	ハチ	マチ	コーチ
2.							
	ニチマン	ミチタ	クチビル	シチリン	ナチ		
3.							
	カク	サク	タク	ナク	ハク	マク	ラク
4.							
	ガクリヨク	サクラ	ニク	シーク	バクダン	チクバ	

5.							
	カシ	サシ	タシ	ナシ	ハシ	マシ	ラシ
6.							
	カシヤ	サシヒキ	チシキ	フシギ	タシカ	ニシタ	

【例外、チの大輪はラには用ゐない】

逆記逆讀に對する杞憂 以上の數例に依つてチクシ法の根本原則是諒解せられたことと思ふが、茲に學習者の殆どすべてが、先づ初めに危惧を感じ疑惑を抱くのは、説明の如く、書く時には第二音を先きにし、讀む時には之を後にするといふ事が、果して實際に臨んで出来るかどうかといふ點である。

成程第二音を先きに書き、先きに書いた第二音に相當するものを後に讀むのであるから、普通の習慣から見ると、正に逆記し逆讀するのであつて、不自然であり、その實行の可能性に疑を挟むのは如何にも無理のないことである。又、實際に方つても初めの内はまごついて、書くにも讀むにも意の如く行かないことは事實である。併ながらそれはホンの僅かの間のことで、少し熱心に練習を續けて居ると、いつの間にか此逆記逆讀も普通の如くに慣れ、何の苦勞もなく、殆ど無意識的に自由に書きこなせるやうになることも亦、本式修得者の齊しく經驗する所である。随つて是等の危惧、疑惑は單なる杞憂として間もなく解消するに至るのである。

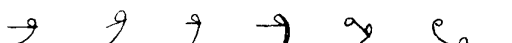
【注意】 唯、茲に特に注意を要することは、同じ鈎や輪でも、首部に書く場合は、是までのやうな尾部に記すのとは、運筆の手加減


が可なり違つて来るから、特に習字に力を注ぎ、その形の崩れぬやう正しく書くことに努めなければならぬ。

第三音以下に應用 誤讀の虞れなき場合は、チクシ記號の前に他の符號を連綴することが出来る。言ひ換へればチ、ク、シが第三音目以下に来る場合でも、他の符號との區別がはつきり付くならば此の法を應用することが出来る。否な斯様にその應用の範圍を擴めてこそ、益々チクシ法の妙用、眞價は發揮せられ、従つて速記能率も一層擧つて来るのである。

(例 95)

1. 
 カタチ カッタ カクク カスタ ゴシヨチ マイニチ


2. 
 カシヤク イシヨク オツク カヅク ハクシヤク フクシヨク

3. 
 カイタク ナイカク タイサク カイマク サイモク

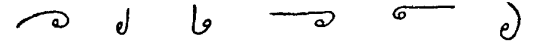
4. 
 ダイナシ マイトシ ハナシ タバシ ヨロシク カナシ

クの小輪 クの小輪は、シの小鉤、ウの大鉤の中にも記すことが出来る。

(例 96)


 カンシヤク ハンシヨク マンジク ホウサク コウシヤク トウチャク


小圓形のス 小圓形のスはすべての鉤の中に記すことが出来る (例 97)


 モウス タンス クダス コース スコシ ソース

誤讀の憂なし 他の場合とは別として尾部有輪側の大鉤の中に記された小輪は、或時は語尾母音記號の一つとなり、或時はチクシ記號のクとなり、或時はスと讀まれるといふやうに、甚だ紛らはしいので、誤讀誤譯に陥りはしないかと誰でも恐れるのであるが、併し是等もその文章の前後の關係、文勢などに依つて容易に正しく讀むことが出来るものである。

拗音とチクシ記號 拗音にチクシ記號を附ける場合は、附點拗音符號を用ゐる。

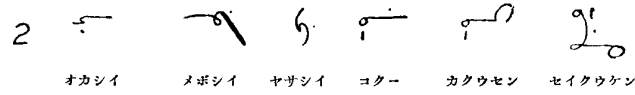
(例 98)


 キューチ キョーチ リヤクジ ヒヤクマン キョーシ

チクシ記號に續く母音と長音 チクシ記號の次に母音の來る時はチクシ記號を長音とする場合には、從屬母音法を應用する。但し從屬母音は特にチクシ記號の右又は下方に之を記す。

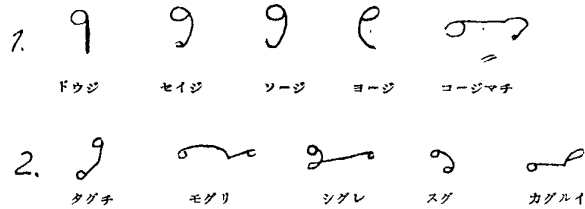
(例 99)

1. 
 カチイキサ タクエツ ガクイ カシウリ トクイサキ キクワ



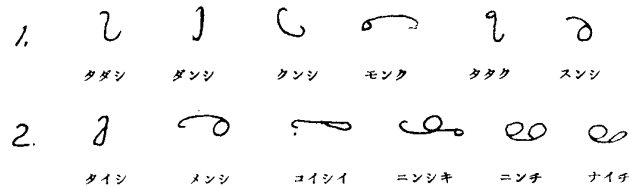
濁音 チクシ記號中、チとクとはその儘濁音にも併用して差支へない。

(例 100)



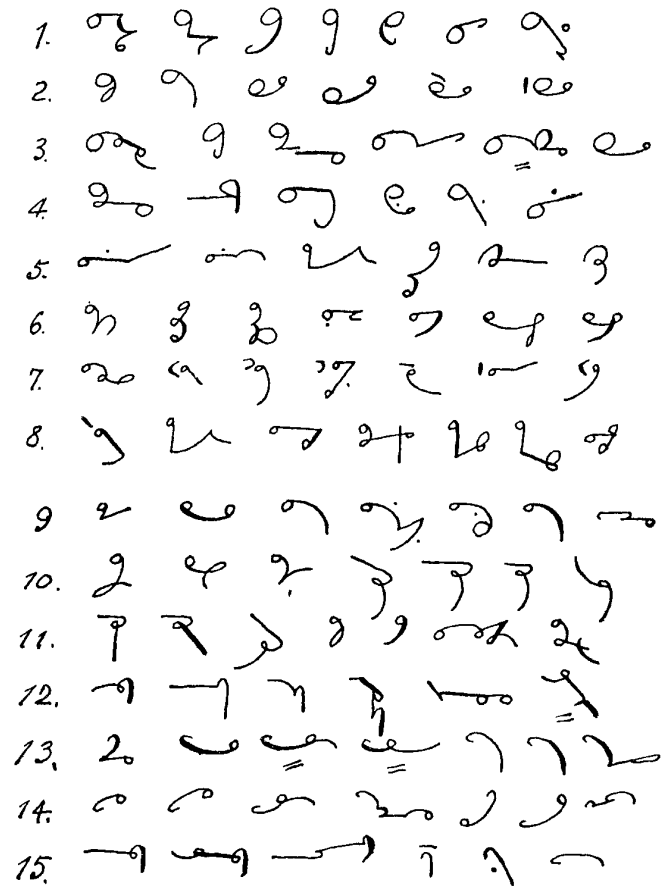
チクシ記號と鈎、わな等の關係 鈎、わな、擴大したる正輪(撥音ン)を有する符號及び四倍形符號(後章参照)の首部にあるチクシ記號は、それ等の記號の後に之を読む。

(例 101)



(例 102)

練 習 13



- 1 勝栗、立上る、瞬時、頓智、天地、ランチ、ボンチ繪
- 2 才智、往時、敷地、即時、排日、大日
- 3 導く、探知、匙加減、勿論、望月、ネジ
- 4 質權、小太刀、御馳走、通知、報知、領地
- 5 玉露、客間、拓殖、食事、全國、穿鑿
- 6 作戰、逐次、昨日、翻一、革新、ネクタイ、肉親
- 7 少い、碇泊、催促、在學中、回復、大神樂、定食
- 8 賣卜者、特色、國事、シークレット、獨立、特別、角逐
- 9 幾ら、長く、多く、大藏省、ウイック、重く、鑑識
- 10 せきくる、逃ぐる、探ぐる、法則、拘束、觀測、不足
- 11 監督、灌木、奉職、細工、辛苦、盲編、四苦八苦
- 12 見出し、今年、渡し、夥し、激しき、日本橋
- 13 新式、長し、永島、習志野、多し、重し、面白い
- 14 力士、歴史、敷島、わしづかみ、赤子、屬し、荒まし
- 15 蓋し、逃出し、志、買ひたし、拍子、若し

第九章 同行累音法

同行の子音が續くとき、その中の一音は母音を以て表はし本符號を省略する方法を同行累音法といふ。

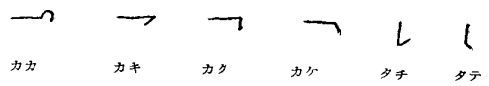
【規則】

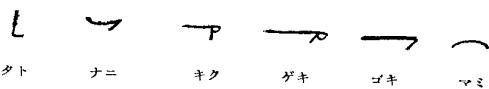
同行の子音が二字續くときは、始めの字は普通に書き、次の字は單にその子音の有する母音のみを連接する。

今一例を以て之を説明すると、カキと書く場合は、カもキも共に同じカ行の音であるから、初めのカは普通に書き、キの字は之を省略して、單にその母音のイだけをカの字の終りに連接する。又タテといふ語は、タ行の同行音であるから、タの字に、テの母音のエを連接するだけでよいのである。

【注意】 此處に連接する母音といふのは、普通母音であつて、語尾母音記號ではない。又圓形半圓形符號には本法は用ゐない。(第二章第五節母音中、普通母音参照)

(例 103)

1. 

カカ カキ カク カケ クチ クテ
2. 

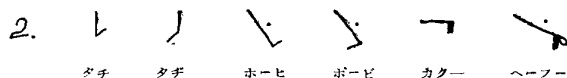
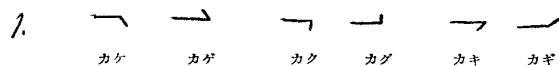
タト ナニ キク ゲキ ゴキ マミ

濁音と長音 省略される文字が濁音の場合は、母音を普通の書き方とは逆に接續する。

但しイの字は上下何れに向つて運筆しても差支へないのであるから、前の字に對して大なる角度を作るものを以て濁音とする。若し上下何れに書くも同角度の場合は、後退方向のものを取る。

長音は、長母音即ち濃線とする。

(練 104)



三字以上續くとき 同行の子音が三字以上續く場合も亦此の原則を適當に應用すればよい。

例へば「カゲキ」と綴るには、カゲを普通に書き終りのキを省略することも出来れば(例 105のイ)カとキとを普通に書き、中間のゲを省略することも出来る。(例 105のロ)

此二つの書き方の中では勿論前者を良しとするが、斯ういふ場合何れを取るかは、前にも述べた通り、常に書き易く読み易いといふことを基準として決定すべきである。

(例 105)



唯、茲に注意すべきは、前の例に於て、初めのカだけを普通に本符號で記し、ゲキは共に省略してその母音のエ、イを連接し、カエ

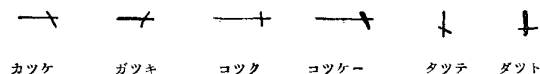
イと書いても差支へないやうに思はれるが、それは許されない。何故ならば同行累音法の省略的の働きは、初めの普通に書かれた文字に直接に接續した母音一字だけに限られるのである。随つてその以下の母音は、最早や同行音省略の役目をせず、純粹の母音として讀まれるに過ぎないから、「カエイ」と書けば、「カゲキ」ではなく、「カゲイ」である。同様に、「マイエ」と綴つてあれば、「マミエ」ではなく、「マミエ」エと讀むべきである。

(例 106)



促音 促音を隔てゝ同行音の續くとき、例へばカツケ、タツテの如き場合は、前の字に次の字の母音を交叉する。

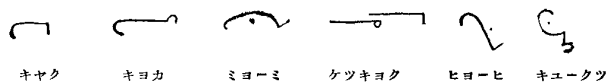
(例 107)



拗音に應用 拗音にも本法を應用することが出来る。拗音符號に母音を接續するときは、同行の拗音でなく、その拗音符號の基本となつた行のその母音に相當する子音を表はす。

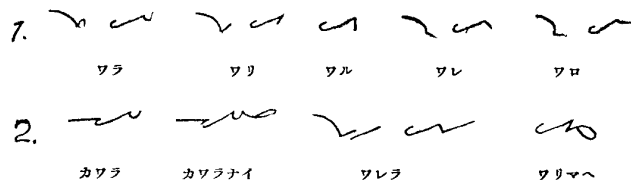
例へばキャにウを接續した場合、それはキャキュではなく、キャ行の基本となつた行、即ち、カ行中のウの母音を有するクを表はし、キャクと讀むのである。

(例 108)



【例外】ワ行は実際に於て同行音の續くことはない。而もワ行としてはワの字があるだけである。故にワの字に母音を接續するとき、特にラ行に相當する子音を讀む。

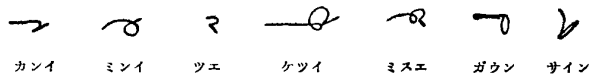
(例 109)



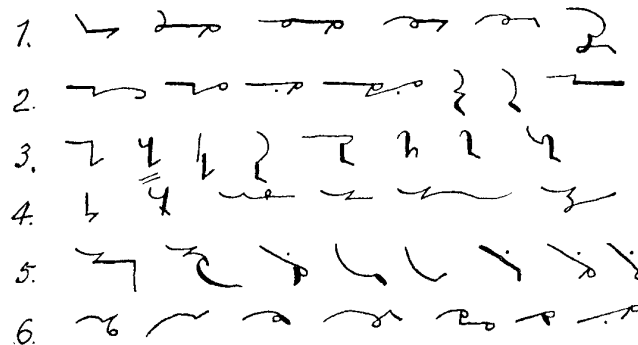
接續すべき母音が前の字と同方向の場合は、書き方通則に従ひ離して書くべきであるが、それは寧ろ普通の符號を用ひ、本法に依らぬ方がテニヲハ符號などゝ混雜する恐れもなく、却て書き易く便利である。

純粹の母音となる場合 橢圓形の母音及びすべての鈎、擴大したる正輪(ン)、圓形半圓形の符號に接續した普通母音は、何れも常に純粹の母音として讀む。(第二章第五節母音中、普通母音、第四章第二節撥音参照)

(例 110)



(例 111) 練 習 14



- 1 葉書、刺戟、喜劇、磨き、見掛、大仕掛
- 2 學問、學理、景氣、激勵、させて、粗製、覺悟
- 3 形、安達、直ち、育て、獻立、出した、出して、下して
- 4 たとひ、先達、何か、何か、何もの、何しろ
- 5 何事、浪花節、弊風、不平、不備、暴風、兵備、兵匪
- 6 まみゆ、無味、未明、目見え、見向き、リレー、恰割

第十章 四倍形符號

カ、サ、タ、ナ、ハ、マ、ヤ、ラ、ワ、ク、ヌ、ル、シャ、チャの十四字は何れも四倍の長さとすることが出来る。之を四倍形符號といひ、元の音にレ又はラを添へて讀む。

但し、サ、タ、ハ、ヤ、チャの如き下方に餘り長くなるものは却て書き悪いし不便であるから、用ゐて特に便利な場合の外は成べく避けた方がよい。

(例 112)

1.				
	カレ、カラ	ナレ、ナラ	マレ、マラ	ラレ、ララ
2.				
	ヲレ、ヌラ	クレ、クラ	ヌレ、ヌラ	ルレ、ルラ
3.				
	ヲレ、ヌラ	ハレ、ハラ	タレ、タラ	サレ、サラ
4.				
	ヤレ、ヤラ	シャレ、シヤラ	チャレ、チャラ	

ラルル、ルル ルの四倍形はルレ、ルラであるが、餘り用ゐられない言葉であるから、特にラルルと讀み、又、ルに語尾母音記號のウを附けるとルウであるが、是も前同様の意味からルルと讀むこ

とが出来ゝる。

(例 113)

ミラルル	セラルル	ナサルル	エカルル

すべての鈎、輪及びわな形の記號は四倍形符號にも用ゐられ、その働きは他の場合と同様である。

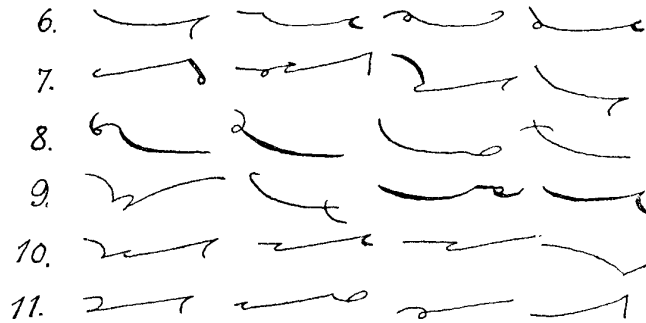
(例 114)

1.				
	カレン、カラン	ナレン、ナラン	ハレン、ハラン	マレン、マラン
2.				
	ラレン、ララン	ワレン、ワラン	カレイ、カライ	ナレイ、ナライ
3.				
	カレス、カラス	カレツ、カラツ	カレク、カラク	ナレシ、ナラシ

(例 115)

練習 15

1.				
2.				
3.				
4.				
5.				



- 1 べからず、遠からず、叱られる、少なからず
- 2 好かれる、作、なかれ、カラタチ
- 3 圖らず、大加藍、枯草、行かれない
- 4 彼等、彼氏、然らば、免かれた
- 5 離れて、なれば、堪らん、止まれ
- 6 なれる、必ず、見慣れぬ、目ならず
- 7 わらび、嫌はれた、思はれる、呉れる
- 8 夕まぐれ、時雨、紅、まつ暗
- 9 仰せらるゝ、クラシツク、濡れ衣、濡れて
- 10 笑はれる、相變らず、乞はれ、我等
- 11 せられる、言はれない、見られ、しやれた

第十一章 鉤及びわな形記號

鉤及びわな形記號は文字の首部或は尾部に用ゐて、次のやうな簡單な語を表はす。

ヒ 首部無輪側に小鉤

へ、へイ 首部無輪側に大鉤

【例外】 ヒの小鉤はラには用ゐない

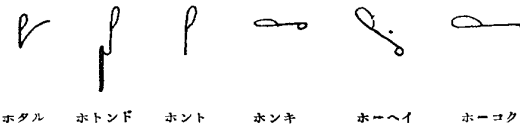
(例 116)



ホ、ホン 首部無輪側に小形のわな

ホー 首部無輪側に大形のわな

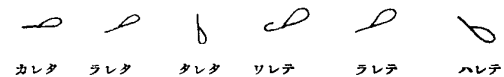
(例 117)



レタ 尾部無輪側に小形のわな

レテ 尾部無輪側に大形のわな

(例 118)



【注意】 以上の諸記號は直線符號のみに用ひる。

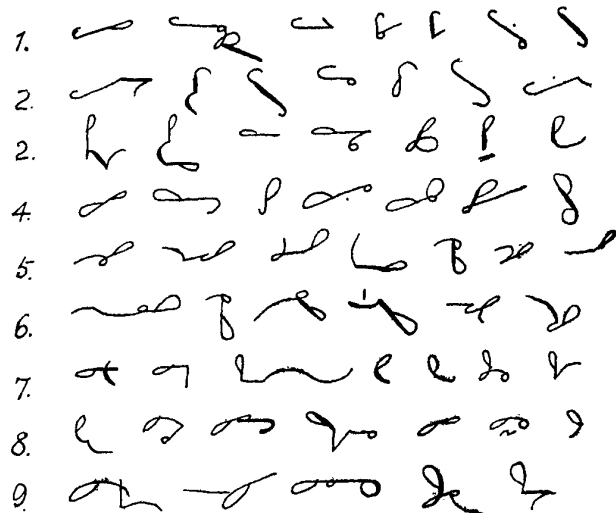
シタ、スタ、ク 首部有輪側に小形のわな

シテ、ステ、ゴ 首部有輪側に大形のわな

(例 119)



(例 120)











- 1 廣い、火消壺、日蔭、ひたすら、常陸、疲弊、非凡
- 2 擴がる、隔て、平凡、平氣、兵隊、兵法、兵力
- 3 述る、帆立貝、外、誇り、本日、本田、本棚
- 4 蓬萊、方向、寶丹、法令、法律、ほうじろ、方便
- 5 見られた、笑はれた、叱られて、よごれた、亂れて、せられた、驅られた
- 6 招かれて、見惚れて、結ばれた、自惚れて、買はれたる、思はれた
- 7 従つて、下方、したたか者、仕立、仕度、親しみ、滴る
- 8 下役、下町、したり顔、下働き、暗い、組合、草
- 9 御尤も、此頃、御機嫌、捨臺詞、捨てたがる

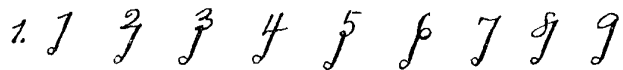
第十二章 数 詞

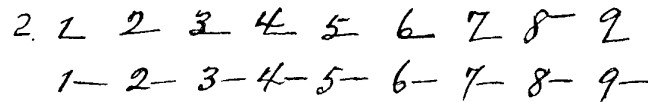
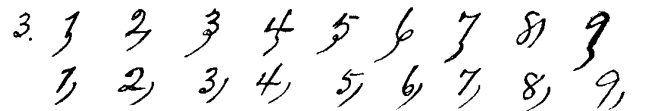
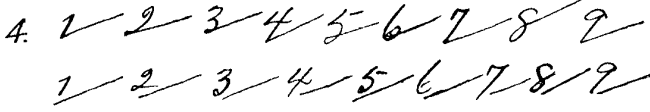
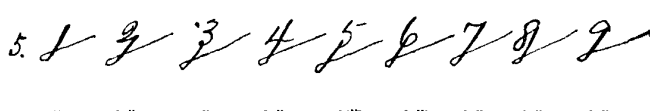
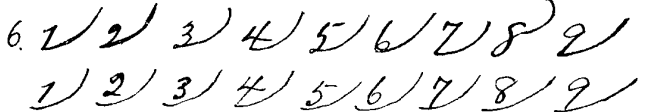
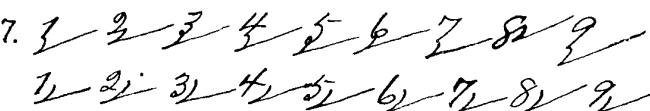
物事の数を表はす数字は、特殊の符號を設けず、何人も小學校時代から書き慣れてゐるアラビヤ數字を用ひる。

大數 唯、大なる數の單位は次の如き符號を以て表はし、數字に接続し若くは離して書く。

- 十  (ジュ)
- 百  (カ)
- 千  (シャ、上より下へ)
- 萬  (ラレ、四倍形)
- 十萬  (ジュ、ラレ)
- 百萬  (カラレ カにラレを接続した形であるが、二個の符號の間に角を付けず、全體に圓みをつける)
- 千萬  (シャ、ラレ)
- 億  (ヤ)

(例 121.)

1. 
 十 二十 三十 四十 五十 六十 七十 八十 九十

2. 
 一百 二百 三百 四百 五百 六百 七百 八百 九百
3. 
 一千 二千 三千 四千 五千 六千 七千 八千 九千
4. 
 一萬 二萬 三萬 四萬 五萬 六萬 七萬 八萬 九萬
5. 
 十萬 二十萬 三十萬 四十萬 五十萬 六十萬 七十萬 八十万 九十万
6. 
 一百万 二百万 三百万 四百万 五百万 六百万 七百万 八百万 九百万
7. 
 一千万 二千万 三千万 四千万 五千万 六千万 七千万 八千万 九千万

8. $\begin{matrix} 1 & 2 & 3 & 4 & 5 & 6 & 7 & 8 & 9 \\ \swarrow & \swarrow & \swarrow & \swarrow & \swarrow & \swarrow & \swarrow & \swarrow & \swarrow \\ 1 & 2 & 3 & 4 & 5 & 6 & 7 & 8 & 9 \end{matrix}$

一億 二億 三億 四億 五億 六億 七億 八億 九億

序数、分数、不定数その他 第一第二の如き序数を表はすには数字の上に前置符号の ダイ を置く。

一つ二つ三つといふ場合は、数字の下に小点を附する。七つ八つ十五六といふやうな、近い数の並ぶ場合は、数字を上下に重ねる。

(例 122)

1. $\begin{matrix} \overset{1}{1} & \overset{2}{2} & \overset{3}{3} & \overset{4}{4} & \overset{5}{5} & \overset{6}{6} & \overset{7}{7} & \overset{8}{8} & \overset{9}{9} \\ \text{第一} & \text{第二} & \text{第三} & \text{第四} & \text{第五} & \text{第六} & \text{第七} & \text{第八} & \text{第九} \end{matrix}$

2. $\begin{matrix} \underset{\cdot}{1} & \underset{\cdot}{2} & \underset{\cdot}{3} & \underset{\cdot}{4} & \underset{\cdot}{5} & \underset{\cdot}{6} & \underset{\cdot}{7} & \underset{\cdot}{8} & \underset{\cdot}{9} \\ \text{一つ} & \text{二つ} & \text{三つ} & \text{四つ} & \text{五つ} & \text{六つ} & \text{七つ} & \text{八つ} & \text{九つ} \end{matrix}$

3. $\begin{matrix} \overset{7}{8} & \overset{15}{8} & \overset{2}{30} & \overset{3}{45} \\ \text{七十八} & \text{十五六} & \text{七三十人} & \text{三百四五十} \end{matrix}$

分数は、分母を表はす数字又は数字符号の右の肩に分子数を稍々小さく書く。

5% の如き整数の後に来る分数は、整数の右下方にコンマ (テニヲハ符号のト) を附し、續いて之を書く。

(例 123)

1. 2^1 四分の三 4^3 十分の五 10^5 百五十の一 150^1

2. 2^1 1^{12} 1^1 5^1
百分の一 千分の十二 萬分の一 百萬分の五

3. 1^1 5^1 6^1 55^1
千萬分の一 五萬分の一 六千分の一 十萬分の五十五


4. $5, 2^1$ $123, 4^1$
五・二分の一 百二十三・四分の一

幾百、何千、數萬、餘、餘萬等の不定或は大約の数を表はすには次の符号を、数字或は数字符号に接続し、又は離して書く。

幾 9 (イク、チクシ記號を用ふ)
何 \cup (ナン)
數 0 (圓形のヌ)
餘 () (ヨ)
餘萬 \swarrow (ヨラレ)

(例 124)

1. 9 \cup 9 \cup \cup \cup \cup
幾十 幾萬 幾千 何百 何千 何萬

2. 

数十 数百 数千 数万 数万 数千 数万 数万

3. 

五百餘 六千餘 四千餘萬 三千八百餘萬 八千九百萬餘

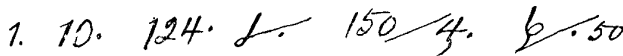
金圓その他の單位 金錢の單位を表はすには、數字又は數字符號の後方の中程に接近して小點を附する。

何圓何十錢といふやうに、圓と共に圓位以下を表はすには、圓の點に續いて錢以下の數字を書く。


單に錢、厘等を表はすには、その數字の後にセン、リンと書く。

その他重量、容量、尺度等はその單位の名稱をその儘書くか、或は最初の一音若くは二音を取り、數字の後の少し下方に記す。

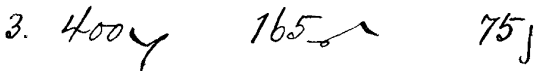
(例 125)

1. 

十圓 百二十四圓 十萬圓 百五十萬四千圓 六千萬圓五十錢

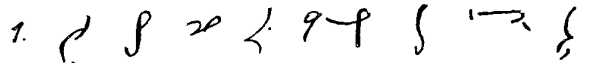
2. 

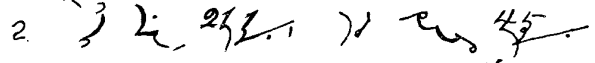
三圓 一圓五十二錢五厘 五十八錢 四分 五釐

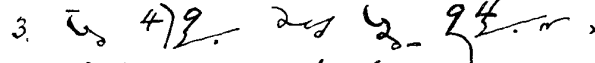
3. 

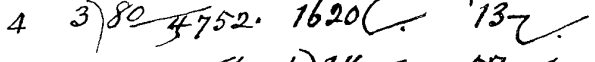
四百グラム 百六十五キログラム 七十五トン

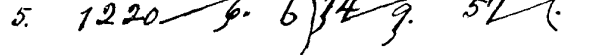
(例 126) 練習 17

1. 

2. 

3. 

4. 

5. 

- 1 新聞紙に報道せられた昭和九年度豫算大綱に依ると
- 2 歳出總額は二十一億一千萬圓で、その内陸軍費四億五千萬圓
- 3 海軍費四億九千萬圓、即ち軍事費が九億四千萬圓である。
- 4 三億八十萬四千七百五十二圓、千六百二十餘萬圓、千三百餘萬圓
- 5 千二百二十萬六千圓、六億一千四萬九千圓、五十七萬餘圓

第十三章 動詞符號

マス、マンタ、マセウ、マセヌ、デス、デンタ、デセウ、アリマス、アリマンタ、アリマセウなどの語は、他の言葉と結付いて、敬讓の意を表はし、又は叮嚀に言ふ動詞或は助動詞として日常最も多く使はれ、而も同時に肯定否定、過去現在未來等を表はす最も重要な働きを爲すものである。それ故に是等の語に對しては特に簡単な文字を作り、之を便宜上動詞符號と名づけたのである。

動詞符號は次の通りである。

現在 $\left. \begin{matrix} \text{マス} \\ \text{デス} \\ \text{アリマス} \end{matrix} \right\} \dots \curvearrowright$ シヤの太きもの、複音文字シソと同じ

過去 $\left. \begin{matrix} \text{マンタ} \\ \text{デンタ} \\ \text{アリマンタ} \end{matrix} \right\} \dots \curvearrowleft$ ルの太きもの

未來 $\left. \begin{matrix} \text{マセウ} \\ \text{デセウ} \\ \text{アリマセウ} \end{matrix} \right\} \dots \curvearrowright$ ワの太きもの

現在進行 $\left. \begin{matrix} \text{マシテ} \\ \text{デシテ} \\ \text{アリマシテ} \end{matrix} \right\} \dots \curvearrow$ モの太きもの、複音文字のミズと同じ

否定 $\left. \begin{matrix} \text{マセヌ} \\ \text{アリマセヌ} \end{matrix} \right\} \dots \curvearrow \curvearrow$ マスに撥音記號の小鉤、或は正輪を附けたもの、但し正輪の方は後に他の語の續く場合のみに用ふる。

動詞符號の類別 「マス」「デス」「アリマス」は、言葉こそ違へ

何れも現在を表はす語である。斯う云ふ文法上の「時」を同じうするものに對しては、前に掲げた如く同一の動詞符號を共通して用ひるのである。併なから、之を書くべき位置は以下述べるやうに、それぞれ異なることに注意しなければならぬ。

説明の便宜上、同じ語系に屬する動詞符號は之を一つの部類として、次のやうに名づけて置く。

マス類 マス、マンタ、マセウ、マンテ、マセヌ


デス類 デス、デンタ、デセウ、デンテ

アリマス類 アリマス、アリマンタ、アリマセウ、アリマンテ、アリマセヌ


動詞符號の綴り方

マス類 他の語に必ず連接する。

(例 127)

1. 

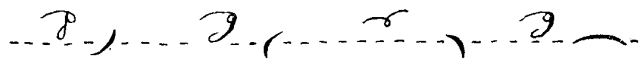
シマス シマシタ シマセウ シマシテ シマセヌ

2. 

申シマス 申シマシタ 申シマセウ 申シマシテ 申シマセヌ

デス類 單獨に、而も罫線上(罫線を通して)に書く。

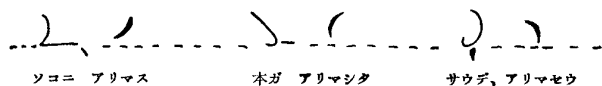
(例 128)



見タイデス 見マセンデシタ 見ルデセウ 見マセンデシテ

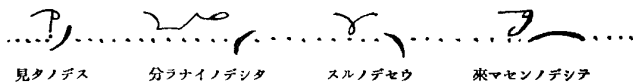
アリマス類 普通の位置に、單獨に書く。

(例 129)



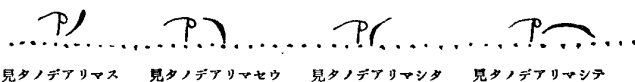
ノにデス類の續く場合 ノデス ノデシタの如き場合は「テニヲハ」の省略法に依り「ノ」を省略する。

(例 130)



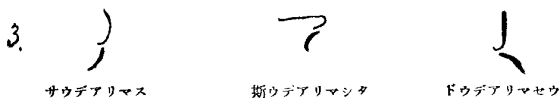
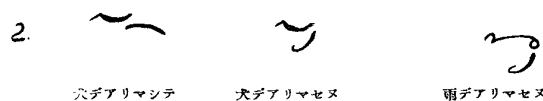
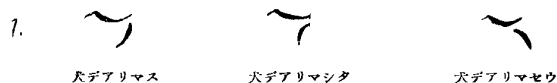
ノデにアリマス類の續く場合 ノデアリマス、ノデアリマシテの如く、アリマス類の前にある「ノデ」は、テニヲハの「ノ」の字を省略すると同様の方法に依り、特に「ノデ」の二字とも全部省略する。

(例 131)



デに續く場合 デアリマス、デアリマシテの如き場合の「デ」も亦之を省略し、テニヲハ符號の「デ」を書くべき位置より動詞符號を書く。

(例 132)



接續語の省略 動詞符號の後に最も多く連接される簡単な語の内、カラ、ナラ、ナラバ、ケレド、ケレドモの五つは一ヌ之を連續することの煩をさけ、次の例のやうに其内の主要な一字だけを動詞符號に接續して、他を省略してしまふ。

カラ	は	ラ
ナラ	は	ナ
ナラバ	は	バ
ケレド	は	ド
ケレドモ	は	モ

(例 133)

	+カラ	+ナラ	+ナラバ	+ケレド	+ケレドモ
マス	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ
マシタ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ
マセウ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ
マシテ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ
マセヌ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ

以上はマス類を例に取つたのであるが、デス類、アリマス類も亦同様である。

ゴザイマスその他 マスマイは、マスにマを、或はマセウに小鉤を付ける。

ゴザイマスは、マス類の前に基礎文字の「ゴ」を付ける。但し單にゴザイマスの場合は「ゴ」の字だけでよい。(第十四章略字参照)

(例 134)

1.

マスマイ マセズ マセネバ シマスマイ シマセズ デキマセネバ

2.

ゴザイマス ゴザイマスカラ ゴザイマシタ ゴザイマセウ

「参りますです」「見ませぬでした」のやうに、マス類の後に、デス類の續く場合は特に之を連接して差支ない。

(例 135)

参リマスデス 見マセスデシタ 知リマセスデセウ 來マスデセウガ

(例 136)

練 習 18

1.

2.

3.

4.

5.

6.

7.

8.

9.

10.

11.

12.

13.

- 1 大博覽會を御覽になりましたか、いえ、まだ見ませんです。
- 2 さうでございますか、それでは若しお差支がありませんでしたら私が
- 3 失禮ですが、御案内申ませう。有難う存じます。
- 4 さう願へますればほんとに幸ひでございます。急ぎませんから歩きませう。
- 5 此博覽會は、迎も大規模のやうに新聞には書いてありましたが、
- 6 さうでもないと思ひます。大掛りだと思へば思へるし、反對に又
- 7 貧弱だと思ふ人もありませう。これは見方に依りませう。

第十四章 略 字

1 速記術に於ける略字の地位

或る語——単語のみならず、句、文等を含む——を發音の通りに記す代りに、その語の中の主要な一音若くは數音を以て之を代表させるものを略字と稱へる。

元來發音の通りに記すことをその目的とし使命とする速記術に於て、斯の如き所謂略字を使用することは實に變則であり矛盾である。併しながら我が國語の極めて複雑な上に、近時外國語は非常な勢を以て流れ込む、新語は次から次へと生れて来る。一方に於ては何事もスピード時代で、我々の言葉も随つて亦だんだん速くなるといふ今日、之に對應して速記の目的使命を遺憾なく果さうとするには、縱令それが變則的な存在であらうとも速記能率増進の上に重要な地位を占める此略字といふものを認めないわけには行かぬ。即ち今日の速記術の發達の程度では遺憾ながら略字なくしては舌の速度に伴ふことを得ない状態にあるのである。吾々は此變則的な略字を驅逐して本來の使命たる記音的速記術 (Phonography) 完成の理想に向つて常に努力しつゝあるのであるが、之が解決は實に我が國語の整理と速記方式の科學的研究の將來に待つべきものが甚だ多いのであつて、今暫くは過渡的所産として、何れの速記方式に於ても、多少の差こそあれ、略字を認めなければならぬと思ふのである。

2 略字の種類

略字構成の原則 それでは略字はどうして作るかと云ふと、或

る語を形づくる音の中、主要な一音若くは數音を綴り合せ、以てその語を代表させるといふのが略字構成の一般的原則である。例へば「コ」を以て「コト」を、「シナ」を以て「シカシナガラ」を表はす如きものである。尙ほ此外に語音とは何の關係をも持たず、任意の記號に或る意味を寓せしめて作るもの、例へば例 137 の 1 の「カミ」、「イエス」の如きものである。前者を普通略字、後者を寓意略字と呼んで置く。

略字の位置 略字を記すには次のやうにそれぞれ位置が定まつてゐる。その位置に依つて更に單獨略字と關係略字とに區別する。

單獨略字—罫線と罫線との間に單獨に記すもので、次の三つの位置がある。

- 第一位 トの字の高さ、即ち罫線の上部
- 第二位 タの字の高さ、或はそれよりも稍々低き位置、即ち罫線と罫線との中間
- 第三位 罫線上或は罫線を貫く（單獨略字の殆ど全部は此位置に記す）

關係略字—或る語に關聯して、その前或は後に記すもので次の六つの位置がある。

- 接頭位 或る語の前端、前置符號と同様の位置
- 接尾位 或る語の後端、接頭位と反對の位置
- 接續位 或る語の終りに直に接續して記す
- 高並位 或る語の終りに接近して稍々高き位置、又はその語の右の肩

否定位 或る語の直下

交叉位 或る語の終りに促音の如く交叉し、又は重ねる。

次に例を以て各の位置を示さう。

(例 137)

1 第一位 = カミ = イエス

2 第二位 . アル y アツタ

3 第三位 ... コト マタ シカシナガラ

4 接頭位 ヒキ ヒキウケ ヒキコム

 トリ トリヒキ トリハカラヒ

5 接尾位 ウケ ミウチ カクキウチ

 ワタシ ウタワタシ ミワタス

6 接綴位 カラ タカラ アトカラ

 ナガラ シナガラ ミナガラ

7 高並位 し べく ナルべく シカルべく

 シテ カクシテ カヤウニシテ

8 否定位 ナケレバ シナケレバ ミナケレバ

 ナクテモ イナクテモ スクナクテモ

9 交叉位 タイジン ソウリタイジン ナムタイジン

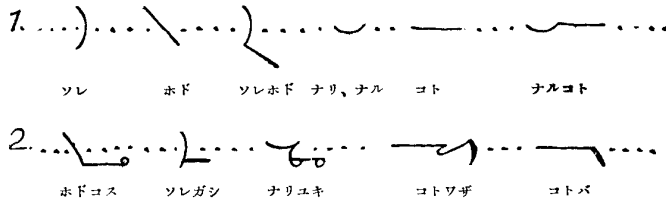
 カリ ハッキリ シツカリ ビツクリ

 キリ

同音はすべて共通す 速記術では、略字たると否とを問はず、その有する音はそれと同音のすべての語の意味に共通する。例へば「はし」「こと」といふ符號は「箸」「橋」「端」「事」「琴」「糊塗」の何れにも通するのである。是等は言語文章の前後の關係から容易に判斷し得られるので、特にその音の強弱高低を示す必要はない。

略字と他の符號との連続 略字はすべて他の符號と離して、定められた位置に別に書くのを原則とするが、簡單で混雜する恐れのない場合は、略字の後に普通の符號を連続し、或は略字と略字（單獨略字）とを互に連続しても差支へない。のみならず、是は後に述べる略字の活用の上に重要な關係を持つべき方法である。

(例 138)



略字濫用の弊 發音の通りに一字づゝ書き綴るよりは略字を用ゐる方が、遙かに簡單で、便利で、能率が擧るから、あれも略字、是も略字と、誰でも無暗に略字を作りたがるのは無理のないことであるが、併し是は深く慎むべきである。

といふのは、何事にも難きを避け易きを求めるのが人情の自然であるから、一線でも一畫でも筆数が少くて樂に書けるところの略字に兎角頼り過ぎる。随つて略字の濫作濫用に流れ、記音的速記術の根幹を爲すべき、最も重要な普通の符號で書き綴る練習が、どうしても疎かになり不十分になつて來る。その結果は演説なら演説を速記するに方り、かねて略字が作つてあり、それを書きこなすだけに練習ができてゐる言葉は何の骨も折れずスラスラと書けるが、さうでない言葉に對しては、ともすると滯滞がちになるばかりでなく、時によると今まで敏速に運んでゐた筆勢が俄に鈍り速度が急に落ちる。此の場合いやでも應でも一字づゝ綴るより外はないのに、平生の練習不足は只だもう徒に氣をいら立たせるばかりで、一向筆は運ばない。マゴマゴしてゐる内に書き落してしまふといふやうな失敗を招くことにもなるのである。

之を速力の上から譬へると、略字は自動車で、普通の符號は自転車のやうなものであると思ふ。自動車は大通りを疾走するには此上もない結構な交通機關であるが、一たび横町や小路に入り込むと速力の低下は勿論、甚しい時は動きの取れなくなることさへあるのは吾々の屢々見受ける所である。之に反して自転車は操縦技術の如何によつては自動車にも匹敵する位の速力を出し得るのみならず、大通りは言ふも更なり、横町小路の隅々に至るまでも敏速に自由に馳驅することが出来る。その活動の輕快さは自動車の及ぶところではないと思ふ。

略字の重要な事は言ふ迄もないが、略字が萬能ではない。否むしるその濫用は大なる弊害の伴ふものである事は前述の通りであるから、自動車に比すべき略字は之を必要の最少限度に止め、専ら普通符號に關する諸規則及び各種の省略法を十分に咀嚼活用して、どんな處でも自由輕快に走破し得る自転車の操縦に熟練せられんことを望むのである。

3 略字の活用

日常最も多く使はれる略字及び之を應用した綴文例は第十五章に纏めて掲げてをいたが、素より是等の略字は日常用語の何百分の一か、極めて少部分に過ぎないのである。然しながら縱令少數でも之を十分有効に活用することに依つて、その働きを二倍にも三倍にも増大することが出来るのである。

活用の方法 それではその活用の方法は如何といふに、凡そ二通りある。既に述べたやうに略字と略字と、或は略字（關係略字を

含む)の後に普通の符號を連続して、或る語を作り出すことはその一つである。(例 138 参照)

もう一つは、動詞、形容詞、副詞の如き、語尾の變化すべき語に對する略字は、その語尾の變化に應じて略字の末尾をも適當に變へるなり、又は單に必要な語尾を接続して、その働きの範圍を擴大し一層効果を多からしむる方法である。

例へば「承る」といふ略字は「ウマル」であるが、之を單に「承る」といふ語に限られたものとせず、「承らん」「承り」「承る」「承れば」「承つて」「承つた」など色々に變化する語尾に對應して略字も亦、ウマラン、ウマリ、ウマレバ、ウマツテ、ウマツタの如く末尾を變へたならば、一個の略字にして、よく數倍の機能を發揮せしめることが出来る。

又、末尾を變へなくても前後の文勢その他の關係から容易に判讀し得られるものは、直に必要な語尾を接続すればよい。例へば「働く」といふ略字に「ない」「て」「た」を接続して「働かない」「働いて」「働いた」とし、「能はず」に「る」「れば」を附して、「能はざる」「能はざれば」とする。是は略字の正面から見ると「能はずる」「能はずれば」と讀むべきであるが、さういふ言葉遣ひはない。常識から判斷して當然前のやうに讀まなければならぬものと思ふ。之と同様な例は他に幾らもあるであらう。

要するに、活用の出來得るものは悉く活用すべく、豫め略字の一つ一つに就いて、詳細な研究をして置くと同時に、一方に於ては實地に臨んでスラスラ書けるやう、常に十分の練習を怠らぬやうにす

ることが最も肝要である。

次に活用に關する十數の例を示して置く。

【注意 1】「申上げ」(第二位)は「申し」の大鈎の中に加點するのであるが、「申上げる」「申上げて」「申上げます」の如く他の語が続く時は、便宜上、加點すべき位置よりその語を書くことが出来る。

【注意 2】「ある」「あつて」「あつた」「あらう」(第二位)の前に來る「で」、マス類の前に來る「ので」は既に述べた規則に従つて何れも省略する。

【注意 3】「といふ」は第三位の略字であるが、前後の文勢等より殆ど誤讀される恐れがないので、テニヲハ符號の「と」と同じ位置に書いてよい。

(例 139)

- | | | | | | | |
|----|------|------|-----|-----|-------|--------|
| 1. | | | | | | |
| | 承ル | 承ハラン | 承リ | 承レバ | 承ツテ | 承ツタ |
| 2. | | | | | | |
| | 伺ヒ | 伺ハン | 伺フ | 伺ヘバ | 伺ヒタイ | 伺ツテ |
| 3. | | | | | | |
| | 面白イ | 面白キ | 面白ク | 面白シ | 面白カラシ | |
| 4. | | | | | | |
| | 驚ク、キ | 驚カン | 驚イタ | 驚イテ | 驚カナイ | 驚カナケレバ |

5. 働ク、キ 働カナイ 働イテ 働キ手 働カナケレバ 働ケナイ
6. 能ハズ(否定位) 爲ス能ハズ 爲ス能ハズル 爲ス能ハズンバ 爲ス能ハズレバ
7. 考ヘ 考ヘル 考ヘテ 考ヘナイ 考ヘタ 考ヘマス
8. 現ハス 現ハシ 現ハセ 現ハレ 現ハレテ 現ハレル
9. 調べ 調べル 調べテ 音楽 音楽會 音楽家
10. 致シ 致ス 致サ 致サン 致セ 致サウ 致シテ 致シタ
11. 致シタイ 致シマス 致シマシタ 致シマセウ 致シマシテ 致スデアリマセウ
12. ト云フ ト云ツタ ト云ツテ ト云ヘバ ト云ウテ ト思フ ト思ヒマス
13. 見ルト云フト 長唄ト云フモノハ 何ト云ツテ 見タイト思ヒマス

14. 申シ 申ス 申セ 申シテ 申シタ 申サウ
15. 申上ゲ 申上ゲル 申上ゲテ 申上ゲタ 申上ゲナイ 申上ゲレバ
16. 申上ゲン 申上ゲル 申上ゲテ 申上ゲタ 申上ゲナイ 申上ゲレバ
17. アル アツタ アツテ アラウ 見ルノギアル 幾ラデアル
18. キレイデアツタ アルデアラウ サウデアラウ アルノデアリマス アルノデアリマシタ
19. アルデアリマセウ アルノデアリマセウ アルノデアリマシテ アルノデス アルノデセウ

臨機的略字 速記術を修める目的は人に依つてそれぞれ異なるから、その應用の方面も自ら政治、經濟、法律、醫學、工學、理學文學、美術、工藝、音樂、商業、農業など非常に廣い範圍に涉るであらう。随つてその向き向きで頻繁に使はれる特殊の術語や用語も必ず相當の數に上るであらうと思ふが、それ等は必要に應じ、略字構成の原則に従つて、豫め適當な略字を作つて置くなり、或は其時々々に臨機的に作るなりすることは、能率を擧げる所以である。唯濫作を避けねばならぬことは言ふ迄もない。

4 成熟語句の省略

A ○○なら○○

「君なら君」「十圓なら十圓」といふやうに、「なら」を挟んでその前後に一綴り(符號で)の同じ語が繰返される場合には、前の語の終りの接尾位に、複音文字の「なら」を書き後の語は之を省略する。若し繰返される語が、二綴り以上の場合は、その語全體の下に更に疊音線を引く。

(例 140)



君なら君

十圓なら十圓

大阪へ行くなら大阪へ行く

B ○○ば○○だけ ○○ば○○ほど

「見れば見るだけ」「行けば行くほど」といふやうな熟語に對しては、前の語の「見れば」又は「行けば」の「ば」に、「だ」或は「ほ」を交叉し、又は重ね、その後の語を省略する。二綴り以上の語が繰返される場合はAの方法に倣ふ。

(例 141)



見れば見るだけ

行けば行くほど

思出せば思出す程



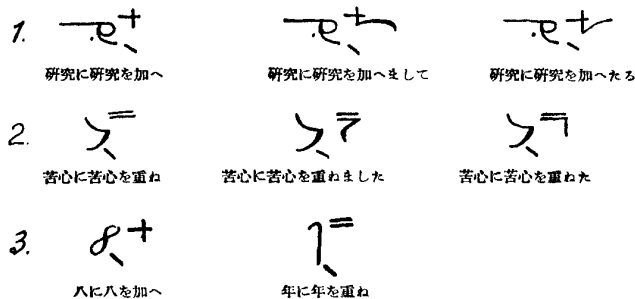
走つて来れば走つて来るだけ

研究すれば研究する程

C ○○に○○を加へ ○○に○○を重ね

「研究に研究を加へ」「苦心に苦心を重ね」といふやうな熟語に對しては、初めの「研究に」又は「苦心に」といふ語の高並位に「十」又は「＝」の如き寓意略字を置き、次の語は全部之を省略する。終りの語の「加へ」「重ね」は語尾の變化に従ひ適當に活用する。

(例 142)



研究に研究を加へ

研究に研究を加へまして

研究に研究を加へたる

苦心に苦心を重ね

苦心に苦心を重ねました

苦心に苦心を重ねた

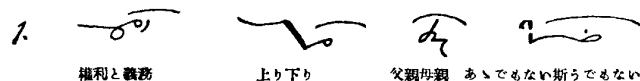
八に八を加へ

年に年を重ね

D 相反する對句的の語

「權利と義務」「上り下り」「父親母親」「あゝでもない、斯うでもない」「分つたやうな分らぬやうな」の如き、相反する二つの語が對句のやうな形になつてゐる時は、初めの語の全部又は一部の上に山形(かぶたけ)の曲線を描き、對句となるべき後の語は之を省略する。

(例 143)

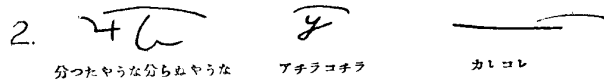


權利と義務

上り下り

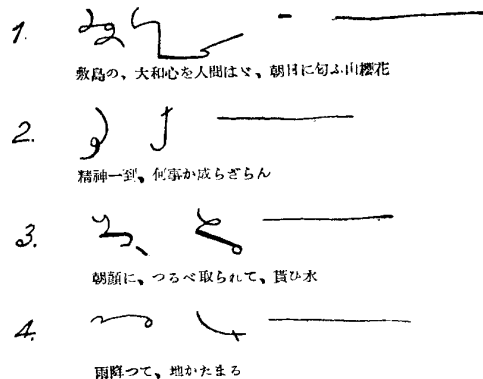
父親母親

あゝでもない、斯うでもない

**E 既知の語句**

詩歌、格言、俚諺などで豫てからよく知つてゐるものは全部を書く必要はない。たゞその初の一句又は一節のみを記し、他は之を省略して長い水平線を書いて置く。

(例 144)

**5 罫紙より白紙へ**

速記用紙は罫紙を用ひるのが原則であるが、練習が進み、符號の大小長短は勿論、全體の形にも親しみ、罫線間の略字の位置にも慣れるに従つて、罫線を離れて白紙に書く習慣をつけることが必要である。白紙の中でもスルガ半紙又は普通の半紙を用ひることは、特に速記を専門の職業とせんとする人に取つては、最も適當であり且

つ經濟的にも實用的にも大なる利益がある。

といふのは、第一、罫紙はその罫の間隔が廣狭まちまちで、丁度自分に好適なものは何處でも自由に求める譯に行かず、値も割合に高いのに反して、白紙は到る處で自由に得られるのみならず、殊にスルガ半紙の如き日本紙を用ひるならば携帯に目方も軽く、値も更に廉くつく。第二は罫線の有無に依つて運筆の自由を制限せられることがない。即ちたとひ罫紙が得られなくても、何の不便をも感じないですむからである。

白紙に移りたてには、罫線がなくて正しく書けるだらうか、略字の位置を間違ひはしないだらうかなど、宛ら盲人の杖を離れたやうな一種の恐怖と不安を感じるものであるが、平生の規則正しい練習さへ出來て居れば、案外正しく書くことが出来るのであつて、練習といふものの力の偉大さ尊さを此處でもハツキリと吾々は教へられるのである。例へば第三位略字ならば自然に指先が罫線と思しき位置に下つて來、普通の符號は又上つて元に復へるといふやうにそれ相當の位置に落着いてくれる。たとひその位置に多少の誤りがあつても、略字か否かは文章の前後の關係に依つてすぐに判斷のつくもので、決して憂ふるには及ばぬ。唯、白紙に移る前に、或る程度の正しい練習を爲すことを忘つてはならぬ。それは符號を亂雜ならしめ誤讀誤譯の原因となるからである。

第十五章 略字集と綴文例

一、略字集

【註】括弧内は略字の綴り(或は種類)と其位置を示す。「寓」は寓意略字、「頭」は接頭位、「尾」は接尾位、「續」は接續位、「高」は高並位、「否」は否定位、「交」は交叉位、「1」は第一位、「2」は第二位。位置の指定なきものは、すべて第三位である。

ア		
㇀	アハセ、ス	(セ、交)
㇁	アラズ	(ズ、否)
㇂	アラギル	(ル、否)
㇃	アルマイ	(マ、否)
㇄	能ハズ	(ヅ、否)
・	アル、アリ	(ア、2)
㇅	アラウ	(ア、2)
㇆	アツテ	(アテ、2)
㇇	アツタ	(アタ、2)
㇈	アレ	(ア)
㇉	有 標	(アサ)

㇊	像メ	(アザメ)
㇋	ア、云フコト	(アユコ)
㇌	アマチ	(アチ)
㇍	餘リ、ル	(ア)
㇎	明カ、現レ	(アラ)
㇏	現ハス	(アラス)
㇐	アナク	(ナク)
㇑	當リ前	(アマエ)
㇒	相變ラズ	(アカヅ)
㇓	有 難イ	(アタイ)
㇔	返ハ	(アツ)
㇕	アメリカ	(アメー)

イ

㇖	否ヤ	(ヤ、續)
㇗	イエス	(ヌ、1)
㇘	イエスキリスト	(ヌ、1)
㇙	勢ヒ	(イオイ)
㇚	如何ナル	(イカナ)
㇛	著シイ	(イチー)
㇜	荷クモ	(イヤシモ)
㇝	言換ヘレバ	(イカバ)
㇞	至ルマデ	(イタマ)
㇟	致シ	(イ)
㇠	致ス	(イス)
㇡	致方ガナイ	(イシナイ)
㇢	イル	(イ)
㇣	愈	(イー)
㇤	盡ク	(イギク)

㇥	聊カ	(イサカ)
㇦	所謂	(イユル)
㇧	イギリス	(イギス)

ウ

㇨	ウチ	(チ、頭)
㇩	ウチ	(チ、尾)
㇪	ウチ、ウル	(ウ)
㇫	伺ヒ、疑ヒ	(ウガイ)
㇬	承ル	(ウマル)
㇭	云々、運動	(ウン)
㇮	美シイ	(ウツ)

エ

㇯	エライ	(エ)
ㇺ	演説、永遠、遠慮	(エン)

オ
















ㇻ	ヲル、ヲリ	(オ)
---	-------	-----

















+	ヲ以テ	(オツエ)
7	凡ソ、及ビ	(オヨ)
∪	面白イ	(オモ)
6	悉ラク	(ラク)
ニ	行フ	(オナ)
7	同ジ	(オチ)
7	赴キ、ク	(オム)
1	驚キ、ク	(オド)
0	音楽	(オン)
7	夥シ	(オクシ)
2	教	(オシ)
7	オイテ	(オイ)
ニ	自ラ	(オノツ)
7	悉ロシイ	(オロシ)
カ		
=	神	(カ、1)
















=	神様	(カ、1)
6	カリ	(リ、交)
6	會議	(ギ、交)
7	カラ	(リヤ、横)
7	カラ	(ラ)
7	必ズ	(カツ)
7	必ズシモ	(カーヅ)
7	斯ノ如キ	(カゴキ)
7	傾キ、ク	(カム)
7	考ヘ	(カン)
7	拘ラズ	(カ、ラ)
7	學問	(ガク)
6	審ミ	(カミ)
7	カヘル	(カル)
7	限リ	(カリ)
6	改良	(カイ)
















7	改正	(カセ)
6	解決	(カイツ)
7	却テ	(カテ)
6	格別、カケツ	(カツ)
7	カハリ	(カワ)
キ		
6	キリスト	(キス、1)
6	キリ	(リ、交)
7	規則	(キク)
7	極メテ	(キテ)
7	聞ク所ニヨレバ	(キトバ)
7	教育	(キヨ)
ク		
6	クリ	(リ、交)
7	國	(ク)
6	位	(クイ)

6	グライ、グアイ	(グイ)
7	企テ	(クワ)
7	區別	(クツ)
7	苦シ	(クシ)
6	繰返シ	(クリ)
6	組合	(クミ)
7	下サイ	(クダ)
7	詳シイ	(クーン)
6	比ベ	(クラ)
ケ		
7	ケレドモ	(モ、交)
6	ケレドモ	(ケモ)
7	決シテ	(ケシ)
7	經濟	(ケー)
7	結構	(ケ)
7	形式、景氣	(ケキ)

	警察	(ケツ)
	結局、計畫、警告	(ケク)
	經驗、輕減	(ケン)
	原因	(ゲン)
	經營	(ケエ)
	結果	(ケカ)
コ		
	コト	(コ)
	事柄	(コラ)
	是レ	(コー)
	今日	(コチ)
	悉ク	(コツク)
	希フ	(コネ)
	心掛	(コ、ケ)
	根本	(コン)
	試ミ	(コ、ミ)

	言葉ヲ換ヘテ言ヘバ	(コエバ)
	因ル	(コル)
	拵ヘ	(コシ)
	如キ	(コキ)
	如シ	(コシ)
	御承知ノ如ク	(コツク)
	御承知ノ如キ	(コツキ)
	御承知ノ通り	(コツト)
	斯ウ云フコト	(コエコ)
	斯ウ云フモノ	(コエモ)
	斯ウ云フワケ	(コエワ)
	斯ウ云フ様ナ	(コエツナ)
	斯ウ云フ様ニ	(コエツニ)
	斯ウ云フヤウナコト	(コエツコ)
	斯ウ云フヤウナモノ	(コエツモ)
	斯ウ云ウ風	(コフク)

	斯ウ云フ風ナコト	(コフツコ)
	外國	(ゴク)
	ゴサイマス、ゴザイ	(ゴ)
サ		
	サレ	(サ、高)
	サレテ	(テ、高)
	サレタ	(タ、高)
	サレル	(ル、高)
	ザルヲ得ズ	(ザン、否)
	ザルヲ得ズ	(ザヅ、否)
	ザルベカラズ	(ザズ、否)
	ザルベカラサル	(ザル、否)
	サリナガラ	(サナ)
	幸ヒ	(サワ)
	賛成	(サン)
	差支	(サシ)

	最初	(サイ)
	妨ゲ	(サゲ)
	サテ	(サ)
シ		
	シテ	(英語のアクセント 記號を高並位に)
	シムル	(ル、交)
	シム	(ム、交)
	シメ	(メ、交)
	然シ	(シ)
	然シナガラ	(シナ)
	而シテ	(シコ)
	調べ	(シラ)
	自然	(シン)
	加之	(シヅ)
	仕方ガナイ	(シナイ)
	示シ	(シシ)

シ	シキリ、シカリ	(シリ)
シ	然ラバ	(シラバ)
シ	實際	(ジサ)
シ	十分	(ジユ)
シ	承諾、所得	(シヨク)
シ	状態	(ジョイ)
シ	將來	(シヨラ)
シ	從來	(ジユラ)
シ	自分	(ヂ)
シ	差別	(シヤツ)
シ	シャベル	(シヤル)
シ	社會	(シヤ)
シ	諸君	(シヨン)
シ	種類	(シユイ)
シ	自由	(ジウ)
シ	宗教	(シユ)

ス

ス	ベカラズ	(ズ、西)
ス	ベカラサル	(ル、西)
ス	スル	(ス)
ス	スレバ	(スバ)
ス	即チ	(スン)
ス	少シ	(スコ)
ス	額ル	(スコル)
ス	須ク	(スカク)
ス	進ンデ	(スンデ)
ス	速カ	(スカ)
ス	随分	(ズ)

セ

セ	セシムル	(ル、交)
セ	セシム	(ム、交)
セ	セシメ	(メ、交)

セ	セラレ	(ラ、高)
セ	世帯	(セ)
セ	性質	(セシ)
セ	先生	(セン)
セ	責任	(セン)
セ	是非	(ゼ)
セ	政策	(セク)
セ	餐簿	(ゼク)
ソ	サウシテ	(ソシ)
ソ	ソレ	(ソ)
ソ	ソレカラ	(ソラ)
ソ	ソレゾレ	(ソゾ)
ソ	ソレ故	(ソエ)
ソ	サウスルト	(ソスト)
ソ	サウ云フコト	(ソエコ)

タ	損害	(ソウガ)
タ	存ジマス	(ブンマス)
タ	大臣	(ジン、交)
タ	爲メ、互	(タ)
タ	大抵	(タテ)
タ	大變	(タイ)
タ	伺ヘバ	(タバ)
タ	忽チ	(タマ)
タ	泰ル	(タマル)
タ	助ケ	(タス)
タ	タケ	(タ)
タ	深山	(タン)
タ	大切	(タイツ)
タ	大概	(タガ)

チ

- ✓ チカラ (チ)
- ✓ 近頃 (チロ)
- ✓ 遠ヒ (チガ)
- / 丁度 (チヨ)
- 9 直接 (チヨク)

ツ

- ツツ、ヅツ (ツ、續)
- ツキ、ツギ (ツ、2)
- 6 ツモリ (ツ)
- 盡ス、シ、 費ス、シ (ツス)
- フ 傳ハル (ツタル)
- フ 司ル (ツドル)
- フ 強イ、キ (ツヨ)
- 2 仕ル (ツマル)
- 2 付テ (ツイ)

、

常ニ (ツニ)

テ

- (テキ (テ、續)
- (テキ (テ、頭)
- ♪ 帝國 (テ)
- (提出 (テシ)
- 6 手摺 (テツ)
- ♪ デキ、デキル (デ)
- (手紙 (テ)

ト

- ノ トリ (リ、頭)
- | フモ (フ、交)
- | 當局 (ト、交)
- | 所 (ト)
- 6 特別 (トツ)
- L 取調べ (トラ)

6

取 締 (トリ)

6

取 扱ヒ (トツ)

9

友 達 (トチ)

ノ

ト云フ (ト)

レ

トシテ (トエ)

メ

ト云フヤウナ (トツナ)

メ

ト云フヤウニ (トツニ)

6

ト云フコト (トコ)

6

ト云フモノ (トモ)

6

ト云フヤウナコト (トツコ)

6

ト云フヤウナモノ (トツモ)

6

取 散ズ (トリツ)

6

時 (ト一)

6

取 扱ヒ (トニ)

6

道 徳 (ドク)

6

取 扱ヒ (トニ)

6

道 徳 (ドク)

6

取 扱ヒ (トニ)

6

取 扱ヒ (トニ)

6

ト云フコト (フユコ)

6

ト云フコト (フマモ)

6

通リ (トウ)

6

ト云フコト (トニ)

6

ト云フコト (トニ)

6

取モ直サズ (トモナ)

6

取モ直サズ (トモナ)

ナ

6

ナサレ、ナサル (ナ、高)

6

ナサイ (ナイ、高)

6

ナクテ (テ、否)

6

ナガラ (ナガ、續)

6

ナクテモ、ナクトモ (モ、否)

6

ナクナル (ナ、否)

6

ナクナイ (ナイ、否)

6

ナルマイ (マイ、否)

6

ナカツタ (タ、否)

6

ナンダ (ダ、否)

ナカラウ	(ロ、西)
ナケレバ	(バ、西)
ナケレバナラヌ	(バン、西)
ナケレバナラナイ	(バイ、西)
ナケレバナリマセヌ	(バーン、西)
ナケレバナラス	(バツ、西)
ナケレバナラナカツク	(バツク、西)
ナケリヤ	(ラ、西)
ナケリヤナラヌ	(ラン、西)
ナクチャ	(チャ、西)
ナクチャナラヌ	(チャン、西)
ナクテハナラヌ	(テン、西)
就中	(ナカン)
何故	(ナユ)
成ベク	(ナク)
ナラバ	(ナバ)

ナキニシモアラヌ	(ナキヌ)
=	
日本	(ニ)
人間	(ニン)
ニ付テ	(ニツイ)
(テニマハ符號の「ニ」に接續してツイを書ク。 以下「ニ」に續く略字はすべて此の例に倣ふ)	
ニ付キマシテ	(ニ付テの上に加點)
ニ於テ	(ニオイ)
ニ於キマシテ	(ニ於テの上に加點)
ニ於ケル	(ニル)
ニ於キマスル	(ニ於ケルに加點)
ニ對シテ	(ニに高並位略字シテを交又す)
ニ對シマシテ	(ニ對シテに加點)
ニ依ツテ	(ニにテを交又す)
ニ依リマシテ	(ニ依ツテに加點)

ネ	
ネバナラス	(ネナ、西)
ネバナルマイ	(ネマ、西)
願ヒ	(ネ)
熱心	(ネン)
願クハ	(ネクハ)
後	(ノ)
残ル	(ノル)
残ラス	(ノツ)
ノミナラス	(ノナ)
望ム	(ノム)
ハ	
博士	(ハ、交)
パーセント	(ハ、高)
始メ	(ハ)

ハナシ	(ハシ)
ハナス	(ハス)
果シテ	(ハダシ)
離レ	(ハナ)
甚ダ	(ハ、)
早ク	(ハヤ)
働キ、ク	(ハラ)
恥カシ	(ハカシ)
場合	(バイ)
甚シ	(ハダシ)
バカリ	(バ)
ヒキ	(ヒ、節)
ヒキ	(ヒ、交)
ヒトリ	(ヒ)
ヒラキ	(ヒラ)

必要	(ヒヨ)
標準	(ヒヨ)
一ツ	(ヒト)
一タビ	(ヒタ)
フ	
フルイ	(フ)
再ビ	(フタ)
不思議	(フシ)
風俗、不足、複雑	(フク)
ハ	
ベク	(ク、高)
ベシ、ベキ	(エー、高)
ヘタテ	(ヘタ)
ホ	
ホド	(ホ)
殆ド	(ホト)

法律	(ホツ)
施シ	(ホコシ)
報告	(ホク)
妨害	(ボ)
貿易	(ボエ)
悉	(ホシマ)
保険	(ホン)
マ	
マヂ	(マ、交)
マタ、マデ	(マ)
全ク	(マツタ)
間違ヒ	(マガ)
マコト	(マコ)
ミ	
皆	(ミ)
見レバ	(ミバ)

自ラ	(ミズ)
見込	(ミヨ)
認め	(ミメ)
導ク	(ミチ)
ム	
背、向ツテ	(ム)
票口	(ムシ)
ムツカシ	(ムカシ)
メ	
迷惑	(メ)
明白	(メク)
明々白々	(メーク)
モ	
モノ	(モ)
モツトモ	(モモ)
モハヤ	(モヤ)

モトヨリ	(モヨ)
勿論	(モチ)
問題	(モン)
目的	(モク)
若クハ	(モクハ)
求メ	(モメ)
専ラ	(モラ)
申シ、申ス	(モウ、2)
申上ケ	(モウの釣の、 申に小籠、2)
申述べ	(モウノ)
申ス迄モナク、イ	(モーウス)
貰ヒタイ	(モラク)
基ク	(モツク)
ヤ	
ヤハリ	(ヤ)
約束	(ヤク)

ㄣ	ヤガテ	(ヤテ)
ㄣ	ヤムヲ得ス	(ヤムン)
ㄣ	動モスレバ	(ヤスバ)
	ユ	
6	故	(ユ)
6	有名	(ユ一)
6	所以	(ユン)
6	許ス	(ユス)
ㄣ	昔フ迄モナク、イ	(ユマナ)
	ヨ	
ㄣ	ヨリ	(ヨ)
ㄣ	要スル	(ヨル)
ㄣ	撞ロナイ	(ヨンナイ)
ㄣ	喜ビ	(ヨロ)
ㄣ	ヨカラウ	(ヨロー)

	リ	
ㄣ	陸軍、理窟	(リ)
ㄣ	利益	(リエ)
ㄣ	利害	(リガ)
ㄣ	理由	(リウ)
ㄣ	立派ナ	(リツナ)
	レ	
ㄣ	歴史	(レ)
ㄣ	連絡	(レン)
	ロ	
ㄣ	勞働	(ロド)
	ワ	
ㄣ	渡シ、ス	(ワ、尾)
ㄣ	ワリ	(ワ、交)
ㄣ	我レ、我ガ	(ワ)
ㄣ	私、渡シ	(ワ)

ㄣ	我輩	(ワハ)
ㄣ	我國	(ワク)
ㄣ	願シ	(ワゾヲ)
ㄣ	御台	(ワイ)
ㄣ	分ル	(ワル)

【注意】「斯ういふこと」といふ略字は、その終りの「こと」といふ部分だけが色々に變つて、斯ういふもの、斯ういふやうな、斯ういうやうなこと、斯ういふやうなもの、斯ういふわけ、斯ういふやうなわけ、といふやうな語が出来て來ることは、略字集の中に示す通りである。従つて「あゝいふこと」「さういふこと」「どういふこと」も亦之と同種の語で、やはり同様に變つて來るから、それに対する略字は此表から省いてある。必要に應じて以上の例に倣つて作るがよろしい。

又、之と類似した他の略字の場合に於ても、すべて此の例に倣ひ、十分に語尾を活用するやうにせられたい。

二、綴文例

1 齋藤首相の施政方針演説の一節

(第六十五議會衆議院議事速記録より)

1. 一、我が國の政治は、
2. 憲法に基き、
3. 民主主義の原則を堅持し、
4. 内外の平和を維持し、
5. 経済の発展を促進し、
6. 教育の普及を期し、
7. 社会福祉の増進を努め、
8. 国民の生活の向上に努め、
9. 国際協力の発展に努め、
10. 世界の平和と繁栄に貢献し、
11. 我が國の発展と繁栄に努め、
12. 国民の生活の向上に努め、
13. 国際協力の発展に努め、

14. 一、我が國の政治は、
15. 憲法に基き、
16. 民主主義の原則を堅持し、
17. 内外の平和を維持し、
18. 経済の発展を促進し、
19. 教育の普及を期し、
20. 社会福祉の増進を努め、
21. 国民の生活の向上に努め、
22. 国際協力の発展に努め、
23. 我が國の発展と繁栄に努め、
24. 国民の生活の向上に努め、
25. 国際協力の発展に努め、
26. 我が國の発展と繁栄に努め、
27. 国民の生活の向上に努め、
28. 国際協力の発展に努め、
29. 我が國の発展と繁栄に努め、

3 ウォーターマン万年筆

...1.....
 ..2.....
 ..3.....
 ..4.....
 ..5.....
 ...6.....
 ..7.....
 8.....
 9.....
 10.....
 11.....
 12.....
 13.....
 14.....
 15.....

—反 譯 文—

1 齋藤首相の演説

(1)諸君、茲ニ第六十五回帝國議會ノ開會ニ當リ諸君ト相見エテ
 (2)施政ノ方針ニ付キ政府ノ所見ヲ陳述致シマスコトハ私ノ光榮ト
 スル所デアリマス。(3)昨年ノ末、長クモ皇太子殿下ノ御降誕ヲ
 (4)拜シマシタコトハ、皇室ノ御繁榮、天壤ト與ニ窮リ無ク、國家
 ノ基礎(5)愈々鞏固ヲ加ヘタル無上ノ吉祥トシテ歡喜勇躍(6)全國
 民ト共ニ慶賀措ク能ハザル所デアリマス。(拍手)

(7)帝國外交ノ方針ハ曩ニ國際聯盟脫退ノ(8)通告ヲ爲スニ當
 テ煥發セラレマシタ詔書ノ御趣旨(9)ヲ奉體シ、新興滿洲國ノ發達
 ヲ促進シテ東洋ノ平和ヲ確保シ(10)延イテハ世界ノ平和ニ寄與セン
 トスルモノデアリマス。滿洲國ニ於キマシテハ、同國(11)官民ノ努
 力ト帝國ノ援助トニ依ツテ、治安ノ維持ハ愈々確實トナリ、財政、
 金融、(12)交通、通信ハ、何レモ次第ニ整備シ、産業ハ益々振興シ
 テ(13)面目頓ニ一新シ、着々トシテ健全ナル發達ヲ遂ゲ(14)日滿共
 存共榮ノ實ヲ擧ゲツ、アルコトハ眞ニ(15)同慶ノ至ニ堪ヘマセヌ。
 又、列國トノ交誼ハ益々敦厚ヲ(16)加ヘテ、何等滄ル所ナク、隣邦
 諸國ノ關係又(17)漸次改善ノ跡ヲ認メ得ルコトハ、邦家ノ爲メ深ク
 (18)喜ビニ堪ヘナイ所デアリマス。

(19)昭和九年度ノ豫算ニ付キマシテハ大藏大臣ヨリ詳細ナル説明
 (20)ヲ致ス筈デアリマスガ、其編成ニ當リマシテハ、我國財政ノ將
 來ニ關シテ慎重ナル(21)考慮ヲ加ヘ、務メテ緊縮ヲ旨トシマシタケ
 レドモ、國際(22)情勢ノ現状ニ稽ヘ、陸海軍ノ國防費ニ多額ノ増加

ヲ必要トシ、又(23)満洲事件費、時局匡救費、及爲替相場ノ變動ニ(24)基ク經費等ハ、昭和八年度ニ引續キマシテ、相當多額ヲ計上(25)スルノ餘儀ナキ状態ニアリマスガ爲ニ、一般會計歳出豫算ノ總額ハ、(26)二十一億千二百餘萬圓ニ達シテ居リマス。之ニ對シテ歳入ハ、經濟界ノ恢復ニ(27)伴ヒ、相當額ノ自然増收ヲ見込ミ得タノデアリマスケレドモ、未ダ増税其他ノ増收(28)計畫ヲ樹立スルノ時期ニ到達致シマセヌノデ、歳入不足額ハ、昭和(29)八年度同様、公債ノ財源ニ依ルコト、致シタノデアリマス。

2 人生の旅

(1)ヂツとして居つては旅は出来ませんから、門を出た時から一步一步と(2)踏み出して行かねばなりません。此歩の運び方がわれわれの世渡りに多く(3)の教訓を示して居りますので、如何に道を急いだとて、二つ(4)の足を一時に出しては歩けるものではありません。さればとて(5)二つとも止めて居れば、いつまでも同じ所に居るの外はない。(6)一歩を出しては一歩を止め、出しては止め、止めては(7)出して進むことが出来るので、人の世も成功を急いで(8)一足飛びに進まうとすれば、顛倒へるの外はありません。さればとて(9)仕方がないと諦めて居れば、是は二つの足を止めて(10)居るやうなもので、どしどし後から來た者に追ひ越されて(11)人生の落伍者となるを免れません。出しては止め(12)止めては出し、急がず、あせらず、しかも倦まず撻まず、一步一步(13)進むのが、最も安全な人生旅行法であります。

(14)人生の旅はいつも平々坦々たる大道ばかりを行くのではあり

ません。(15)時には峻しい山道もあり、高い山をも越えねばなりません。(16)山を越すのは麓から一直線に頂上に走せ登れば(17)一番早いやうですが、そこには道らしい道もなく、(18)胸突くばかりの絶壁を攀ち登り、木の根、岩角に(19)すがり、危険此上もないばかりでなく、身體も早く(20)疲勞してなかなか登ることが出来ませんが、急がば廻れで、(21)山路羊腸と昔の人もいひました通り、廻りくねつて(22)或は右へ、或は左へ、少しづつ歩を運んでまゐりますと、いつか(23)峠の茶屋で後から來る人を待つことが出来るやうになるのであります。

(24)峠の茶屋に憩うて、遙かに沖行く船や、麓の往還を(25)行きかふ自動車などを見渡しますと、そこにも人生の教訓があります。真帆(26)片帆、いづこよりか水平線上に現れ、しばしの間に何處ともなく水平(27)線下に没し去る船や、忽ちに視野に入り來つて又眼界を(28)去る自動車は、恰も人生の何處よりか來り、何處へか去り(29)生の從來する所を知らず、死の趣向する所を知らぬのに似ては居りますまいか、(30)船には着くべき目的地があり、車には又行くべき所が定つて(31)居ります。人生抑も何れへ向ふのでありませう。

3 ウォーターマン万年筆

(1)ウォーターマンと云へば 万年筆、万年筆と云へばウォーターマンをすぐに(2)聯想する程、有名なあのウォーターマンといふ人も、初めは(3)保険の勧誘員であつた。偶々或る契約を得て、喜んでそれに對して、(4)契約書を書いた所が、生憎万年筆のインキが(5)こぼれて書類を眞黒によごしてしまつた。その爲に(6)申込人

の怒りを買ひ、折角の契約はその場で(7)断はられ、自分も保険会社から解雇せられたので(8)非常に發憤し、それから彼は何とかしてインキのこぼれる(9)ことのない立派な万年筆を發明せんと、熱心に(10)研究に研究を重ねた結果、遂に「ウォーターマン万年筆」を(11)作り出し、今日の巨萬の富を作る基礎を作つたのである。(12)彼は後、人に「あの時にインキがこぼれなかつたら(13)自分は生涯保険の勧誘員で終つたらう」と語つたさうである。何が人に(14)幸ひするかは分るものではない。彼は實に禍を(15)轉じて福とした一人である。

第十六章 外國語の書き方

現代の我が國語中に流れ込んでゐる外國語は、實に夥しい數に上り、その發音もまちまちで、或は日本語化し、或は外國語その儘を話すといふやうに、人に依つてそれぞれ違つてゐる。併しながら之を速記に取る場合には、その發音の如何、正否は問ふところでないすべて聴くがまゝに記すべきものである。

所が日本語化されてゐるものは問題はないが、外國語その儘に發音されるものの中には、日本語速記文字では到底之を表はし得ない音が可なり多いのである。本速記術は素より日本語が目的であり對象であるから、この目的外の外國語を完全に寫すの不可能なことは言ふまでもない。けれども今日外國語が日本語同様に吾々の言葉の中に織込まれて居る以上、完全なことは望めないにしても、成るべく原語に近い記音方法に依つて之を書取ることに努めなければならぬのである。

即ち私は次の如き二つの方法に依つて此の目的を達することにして居る。

第一、日本語に類似した音に對しては、少しの無理はあつても間に合せ得られるだけは、現在の速記文字を用ひる。

第二、全然日本語に無い音に對しては特定の文字を用ひる。

第一に就いては例を英語に取ると、la, li, lu, le, lo. ra, ri, ru, re, ro はラ行、va, vi, vu, ve, vo. はハ行の濁音、si, shi, thi. ge, je, ze, the はサ行のシ、ゼを以て間に合せ、ter, tir, tor, tur. mer.

mir, mur の如き、所謂曖昧音に対しては、ター、マーのやうに長音を以て間に合せる。但し反文の際には成るべく原音に近い日本語字を當嵌めるべきは勿論である。

第二の特定の文字に就いては、その外國語の音に最も近い速記文字の前側第二位(中央)に加點して之を表はす。即ち次の通りである。

ト (t) トの前側に加點す (trade, art の t の如く發音せられるもの、及び之に似た音)

ティ (ti) チの前側に加點す (artist, kitty の ti, ty の如く發音せられるもの)

テュ (tu) チュの前側に加點す (situation, student の tu の如く發音せられるもの)

ド、ディ、デュ (d, di, du) ト、ティ、テュ (t, ti, tu) の濁音形。

ファ、フィ、フェ、フエ、フォ (fa, fi, fu, fe, fo) ハ、ヒ、フ、ヘ、ホの前側に加點す(ヴァ、ヴィ、ヴ、ヴェ、ヴォはバ、ビ、ブ、ベ、ボを以て間に合せることにしてあるが、特に區別せんとする場合はファ、フィ、フ、フェ、フォの濁音形を用ふればよい。

クワ、クキ、クエ、クオ (qua, qui, que, quo) kwa, kwi, kwe, kwo と發音せられるもので、カ、キ、ケ、コの前側中央に接して英語のアクセント記號(下向の短斜線)を附す、クワは拗音符號を用ひてもよい。

ツァ、ツェ (チュ) ツォ (za, ze, cha, zo 或は ca, ce, êe, co) サ、セ、ソの前側に加點す。

ウィ、ウェ、ウォ (wi, we, wo) 複音文字のウィ、ウェ、ウォと同じ。

長音 長音は拗長音の例に倣ふ。即ち前側の加點を太くする。

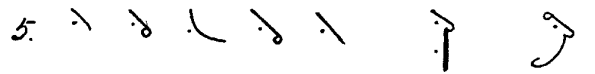
(例 145)

1.						
	ト	ティ	テュ	トレン	トウリスト	アート
	(t,	ti,	tu)	(train)	(tourist)	(art)

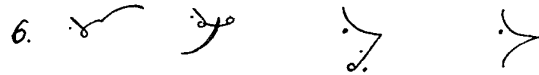
2.				
	チケット	シティ	ステューデント	シチュエーション
	(ticket)	(city)	(student)	(situation)

3.						
	ド	ディ	デュ	ドラゴン	ドライブ	アドレス
	(d,	di,	du)	(dragon)	(drive)	(address)

4.				
	スタジオ	ダイナー	スケジュール	デューリング
	(studio)	(dinner)	(schedule)	(during)



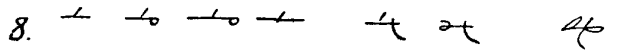
5.	フア	ファイ	フエ	フェ	フォ	フアンド	ファンクション
	(fa,	fi,	fu,	fe,	fo)	(f.a.n.d)	(function)



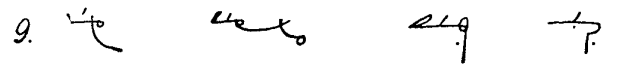
6.	フィルム	フィニッシュ	フューチャー	フューム
	(film)	(finish)	(future)	(fume)



7.	フェース	フェルト	フォックストロット	フォルテ
	(f.ace)	(felt)	(fox-trot)	(forte)



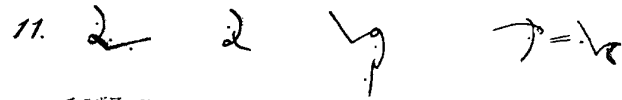
8.	クワ	クキ	クエ	クオ	クワック	インクワイヤ
	(qua,	qui,	que,	quo)	(quack)	(inquire)



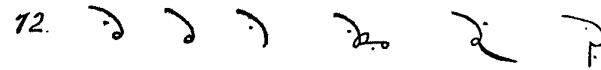
9.	エクキツブ	イークキノツクス	インクエスト	クォーター
	(equip)	(equinox)	(inquest)	(quarter)



10.	ツァ	ツエ(チエ)ツォ	モーツァルト	ツェツペリン
	(za,	ze, che, zo)	(Mozart)	(Zeppelin)



11.	チエヴァーロ	チエツク	ホリゾン	メツツオフォルテ
	(chevalo)	(cheque)	(horizont)	(mezzo-forte)



12.	ウィ	ウエ	ウォ	ウイスキー	ウエーブ	ウォーター
	(wi,	we,	wo)	(whisky)	(wave)	(water)

以上はホンの間に合せの、姑息な方法ではあるけれども、練習さへ積みめば相當の成績を擧げ得ると確信して居る。是れ以上は正式な外國語速記術の研究に依る外なく、日本語速記術としては不十分ながらも、先づ此程度を以て満足しなければなるまいと思ふ。

(因に、ガントレット式は、ピットマン式のあらゆる手法が應用されてゐるので、若し外國語速記法を研究せんとする人は、ピットマンの方式を選ばれることが、覺え易く最も便利であることを附言して置く。)

第十七章 標 號

速記文中に用ひる標號は次の通りである。14以下は各種の會議座談會等の場合に用ひられる評語その他に關するものであるが、此外必要なものは、隨時普通の符號で綴り、この例に倣つて、圓を以て之を圍むなり、或は括弧を以て本文と區別して置けばよろしい。

- 1. x 段落
- 2. = 名稱
- 3. ... ↙ ... ダツシユ
- 4. = 合 字
- 5. ^ 脱 字
- 6. " " 引用
- 7. ↓ 感 嘆
- 8. ? 疑 問
- 9. [] () 括 弧
- 10. ≡ 未 完
- 11. ≡ 17 十七頁に續く
- 12. ≡ 承 前
- 13. 17 ≡ 十七頁より續く

- 14. ○ 笑 聲
- 15. ⊙ 拍 手
- 16. ⊙ 〇 ヒヤヒヤ
- 17. ⊙ 〇 賛 成
- 18. ⊙ 〇 異議なし
- 19. ⊙ 〇 ノーノー

(例 146)

- 1. ... (...) ...
- 2. ... ⊙ ⊙ ...
- 3. ... ⊙ ⊙ ...
- 4. ... (...) ...
- 5. ... ⊙ ...
- 6. ... ⊙ ...
- 7. ... ⊙ ...
- 8. ... ≡ ...
- 9. ... ≡ 17 ...
- 10. ... ≡ ...
- 11. 17 ≡ ...

1. ○司會者 愈々シーズンになりましたので、スポーツに関する皆さまのお話を伺ひたいと存じますが
2. 陸上競技から先きに願つた方がよいかと思ひます(「賛成」「異議なし」)
3. 初めに A さんに願ひませう。皆さん如何でせう。(「ヒヤヒヤ」拍手)
4. ○A君 それでは御指名に依り先づ私の三度の食事よりも好きな
5. 野球(笑聲)から始めませう。野球界では何と云つても所謂六大學
6. リーグ戦——六大學と云ふのは、法政、立教、早稲田、慶應
7. 帝大、明治の六校です、是がその花形であると言はなければならぬと考へて居ります。
8. 何れ此點に就いては次の時間にお話することに致しませう。(未完)
9. 選挙法の改正の議は毎年毎年起るのであつて(十七頁に續く)
10. (承前)本日は「我此土安穩、天人常充滿」といふことに就いて
11. (十七頁より續く)聊か説明を致して皆様のお清聴を煩したいと考へます。

第十八章 結 語

規則に囚はれぬこと 以上各章に涉つて述べた連綴法、省略法に關する法則は可なり複雑してゐるが、是等は、色々な場合に於ける色々な書き方の一般を示したものであつて、いつでも是等のすべてを應用しなければならぬわけではない。常にその時々々の符號の性質、連綴上の關係等を考慮して、最も適切便利な方法を探るなり、或は單に自分に書きよと思ふ方法を自由に撰んで宜いのであつて、徒に規則の末に囚はれて運筆の滯滞を來さしめることのないやうに注意しなければならぬ。

例へば同行の子音より成る語は、必ず同行累音法に依らなければならぬとか、第二音目にチ、ク、シの音を含む語は、チクシ法に依らなければならぬとかいふやうに、一概に考へることは、取も直さず規則にこだはり、自ら綴字の自由を制限し、書き方の範圍を狭めるものであつて、その不利益は言ふまでもない。この場合先づ同行累音法、チクシ法に就いて考へ、更にそれよりもより良き方法、より能率な書き方が他にありはしないかといふことをも同時に考へて見なければならぬ。若し他に優れたものがあるか、或は自分に最も書きよいと信ずる方法があれば、それを直に用ひるがよろしい。

又、「てにをは」の「の」は省略することが出來ると云へば、いつでも之を省略しなければならぬやうに考へることも同様である。「の」が餘り多く續く場合は、その全部を省略しないで適當に「の」を書く方が、却て混雜を防ぐことが出來る。又餘りに小形の文字の

(190) —ガントレット式日本語速記術—

前や後には「の」を省略しない方が、多くの場合誤読の危険がなくてよい。

要するに規則があるからと云つて、すべての場合をその規則に當て嵌めんとするやうな、無意味な努力を避け、あらゆる法則を適當に取捨選擇して、巧に之を活用するやうに心掛くべきである。

躊躇する間に失敗する 「躊躇する間に失敗する」といふ諺がある。速記術に於て特に此感を深うするのである。速記の實務に携つた場合は、武士が戰場に臨んだと同然で、斬るか、斬られるか、討つか、討たれるか、二つに一つである。瞬時たりとも精神の緊張を缺いてはならぬ。聴くがままに、少しの遲滯もなく、言々々々之を漏らさずノートして行かなければならぬ重大な責任がある。たとひ平素聴きなれない、書き慣れない言葉に出會はさうとも、あわてたり、あせつたり、或はあゝ書かうか、斯う書かうか、是よりも此の方が書き易いなどと、思ひ惑ふことは大禁物である。一瞬の躊躇も大なる破綻を來すことを忘れてはならぬ。綴字の良否、便不便はこの場合問ふところでない、瞬間に頭に閃いたまゝを、直ちに大膽に、自由に、樂な気持ちで筆に表はすことが、勝を制する所以であり、美事な成果を齎らす秘訣である。

是は實地に臨んだ場合、謂はゆる眞劍勝負に於ける心得であるが、最も肝要であり、望ましいことは、既に度々述べた通り、常に綴字に關する細心周密な研究と、速度に對する機まぎる技術の練磨とに依つて、何時でも躊躇なく、スラスラと運筆し得るだけの確實な根基を作つて置くことである。

以上を以てガントレット式速記術に關する説明は一通り終つた。全體を通じて成るべく分り易く、且つ綴字例等も出来るだけ豊富に收め、可なり詳しく説いた積りである。併しながら、紙數の制限その他の關係から、尙ほ盡さない點もあるかも知れぬが、それは改修増補の他日の機會に譲り、一先づ之を以て筆を擱くこととする。

— 完 —

質 問 歡 迎

疑問を疑問として解げざるまゝに放つて置かれることは、進歩上達に非常な妨げとなります。御不審の點は次の規定に依りドンドン御質問下さい、出来るだけ丁寧に、速にお答へ致したいと思つて居ります。

規 定

- 一、質問の要點を明瞭に記すこと。
- 一、添削を乞はるゝ速記文字には、原文を附記し且つ訂正の餘白を適當に存置すること。
- 一、住所氏名はハッキリと認むること。
- 一、返信料として郵券十錢封入のこと。
- 一、宛名は、東京市、澁谷區、代々木初臺町、五三六 森上富夫

ガントレット式日本語速記術

昭和九年十月十八日 印刷
昭和九年十月廿一日 發行

定價 金壹圓八拾錢
(郵 稅 八 錢)

著 作 兼 發 行 人 森 上 富 夫
東京市澁谷區代々木初臺町五三六

印 刷 人 飯 野 虎 吉
東京市麩町區內幸町二ノ三

印 刷 所 ダイヤモンド社印刷部
東京市麩町區內幸町二ノ三

東京市麩町區內幸町二ノ三

發行所 經濟雜誌 **ダイヤモンド社**

電話銀座(57)4155・4156・4157

振替東京 25976番

取次所 中央速記會

東京市澁谷區代々木初臺町五三六